

國學院大學學術情報リポジトリ

今川氏真の詠作における助動詞「らむ」：
主として活用形の用法と助詞との関連について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 色川, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000937

今川氏真の詠作における助動詞「らむ」

——主として活用形の用法と助詞との関連について——

色川 大輔

キーワード：今川氏真、助動詞「らむ」、「こそ」の係結び、疑問語、

格助詞「の」

一、はじめに

今川氏真の詠作における助動詞「らむ」については、前稿「武家歌人今川氏真の詠作における助動詞「らむ」について——疑問語との結びつきをめぐって——」（参考文献九）において取り上げたことがある。しかし、前稿では、計量的把握からの「冷泉家の語法」についての想像が先走り、実例に基づいた語法的な考察がまったく疎かになった観がある。本稿では、今川氏真の詠作の実例に則して、その語法現象について、助詞との関連を主として取り上げ、

些か考えを巡らしてみる。

なお、今川氏真の詠作について使用した本文は前稿と同様であり、挙例の際には歌集名と歌番号、底本の頁数を付した。また、勅撰和歌集本文については参考文献一七を使用し、挙例に際しては歌番号と頁数を付した。

引用文中、今川氏真の詠作および勅撰和歌集の用例には、私に文字囲や傍線を付したものがある。その他の引用における傍書や傍線等は、特に断らない限り、底本のままである。

二、連歌論の示す語法把握について

ここでは本稿で参照する連歌論における語法把握につい

て、少々述べておく。連歌論書でも、既に指摘されているように、『手爾葉大概抄之抄』に先立つものと言われることのある『連歌諸躰秘伝抄』が述べるように、早くから疑問語と助動詞「らむ」との結びつきは強く語られることがあり、「姉小路式」との先後関係も論じられている。

本稿の取り扱う今川氏真とゆかりのある里村紹巴が豊臣秀吉に献上した『至宝抄』（本文は参考文献一二二を使用）には以下のように見える（傍書は引用者）。

はね字の事いついづれいくなにな^{ママ}とたれとうのことはにてはね申候そのほかかとやとにてはね申候此字なく候ハはねられす候（五七八頁・五七九頁）

これは「姉小路式」に見えるものと、同工異曲と言つてよいであろう。同じく連歌師の手に成つたものと思われるものとして、近世初期の写本とされる大阪天満宮文庫蔵『連歌てにをはの口伝』と題するものから、冒頭の「一、てにをはの事調子にたとへ侍り」に始まる学書の記述を見ておく（本文は参考文献二〇を使用）。この書も、翻刻されてから久しいが、てにをはの研究の上ではあまり取り上げられていない。奥書に寛永八年三月上旬の識語を持ち、「右一

卷依昌琢法眼拝借則以自筆本写之者也」（一四三頁）とある。詳細は不明であるが、もしこの「昌琢法眼」が里村昌琢を指すのであれば、『至宝抄』の著者里村紹巴の孫に当たる人物になる。この文献の性質は明らかではないが、これにも、以下のように見える。

惣別、覽と留る事、ハかで・ハつなど、さてたれか、如此等之押字にて留るなり。（一三九頁）

「姉小路式」等とは形式が異なり、また、例文は助動詞「む」による終止の文のようだが、助動詞「らむ」と疑問語との結びつきの認識は有しているようである。

この『至宝抄』と『連歌てにをはの口伝』とを、「姉小路式」等と併せて本稿では参観することにする。

三、活用形の用法について

活用形の種類については、明らかな衰退を認める。今川氏真の詠作の用例においては、終止形・連体形の用例のみが見え、已然形の用例については次に述べるように「こそ」の係結びによる存疑の例だけである。よって、今川氏真の詠作における助動詞「らむ」は外形上変化の無い、無活用

助動詞となつてゐるとも言える。

活用形の用法としては、『新続古今和歌集』に比べると様態が少し異なるようである。『新続古今和歌集』では、

終止形終止法、疑問語による連体形終止、係助詞「ぞ」による係結びでの連体形終止、連体形連体修飾法、係助詞「こそ」による係結びでの已然形終止、終助詞「や」を下接する已然形があると報告したことがある（参考文献七）。

今川氏真の詠作では、係助詞「こそ」の係結びの結びの用例については次に述べるとおり存疑であるが、右に述べた『新続古今和歌集』におけるものについては、終助詞「や」を下接する已然形については見られなかったものの、その他の用法は概ね認めることが出来た。他に格助詞「の」による連体形終止が一二例確認出来た。

格助詞「の」による連体形終止は、『千載和歌集』（四例）、『新勅撰和歌集』（四例）、『続後撰和歌集』（四例）の用例を報告したことがある（参考文献八）。今川氏真の詠作における傾向は、分布的には『新続古今和歌集』よりはやや遡ったものの方に近いようである。

以下、「こそ」の係結びの結びとなるものと、格助詞「の」

による連体形終止について、扱っていく。

四、「こそ」の係結び崩壊の様態

「こそ」の係結びの結びとなるものは、先に述べた、存疑の例があるのみである。

見るに「こそ」深き浅きはかはらん宮も藁屋もふれる
白雪（詠草中四八五番歌。七七二頁）

係助詞「こそ」の結びとなるものが極めて稀なのは、以前の勅撰和歌集についての報告においても同様であり、不思議なことではない。

結びの「らむ」の下に体言がある時には、連体形接続法内部での結びの流れを来すのか已然形で終止するのか、専門歌人の中でも既に平安時代末期には動揺していたことが指摘されているが、管見に及んだ先行研究の指摘では、議論となっているものは四句切れ体言止めの用例であり、右の例は体言止めではあるものの、句格が異なっている。

『詠草中』の本文の底本は、井上宗雄・松野陽一「今川氏真全歌集」（参考文献一三所収）によれば、「江戸初期写で、氏真の筆蹟に酷似する」（七九〇頁）とされ、今川氏

真自筆とはされていない。理由には、本文傍書に「歟」の文字が見えることなどがあるのかもしれない。また、本文には草稿のように思えるところもある。

写本であり誤写であるという可能性もあるが、原態に「らん」とあった蓋然性はあると思う。既に「こそ」の係結びが崩壊を始めてから久しいからである。

そして、「こそ」の係結びの已然形終止の把握は、助動詞「らむ」については、特殊な崩壊の形態を来していたように思われる節がある。係結びが崩壊してきているからこそ、「姉小路式」等の理論的把握の記述が現れたのだと考えられているが、その理論的把握の記述そのものも動揺していたように思われるのである。

「姉小路式」においては、「五音第四の音」（『姉小路家手似葉伝』。参考文献二五、七〇頁）すなわち「め」が、「こそ」の「留り」として指摘されており、挙例もある。この指摘は、『春樹頭秘抄』以後においても踏襲されている。マ行音についても指摘がある。

里村紹巴『至宝抄』には、「こそ」による係結びについて、下記のような記述がある。

一こそと申候てけりともけるともとめ申さす候れと大りやくとめ申候（五七八頁）

マ行音については言及がないが、エ列音で終止することについての認識と受けとることが出来る。

係助詞「こそ」の結びの用言の活用語尾がエ列音になることについては、同じ『詠草中』の中にも、

世中のしられぬ物のかす／＼に我心こそはしめなりけれ（七七五番歌。七八五頁）

といった形で用例が見えるのであり、今川氏真にその認識がなかったようにも思われないのである。或いは、口語の助動詞「らう」が既に無活用化していたことなどが、影響しているのであろうか。

『新統古今和歌集』でも一例しか確認出来ず、用例の稀な活用形になっていたことから考えるに、語法的把握が相当難しくなっていたであろうことは想像出来る。

「こそ」の係結びについては、『連歌てにをはの口伝』にも、「こそとある句のとめは必けれと侍るべし」（一三七頁）という『至宝抄』同様の記述がある。

ただし、『連歌てにをはの口伝』の「こそ」の係結びの

把握については、若干詳細なものとすることも出来る。右の記述の項の末の方には、以下の記述がある。

但、こそと候ても押字^マあれ、けりともとめ申候。

八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり（一二七頁）

挙例の文は「人こそ見えね」で係結びが成立している。これを「こそ」の係結びの把握の誤りと見ることも出来ると思う。「押字」の指すものが判然としないが、或いは、例の「かかへ」と「おさへ」のこともあるので、係結びの結びである「見えね」の「ね」のことであろうか。『連歌てにをはの口伝』の「押字」という用語について調べていないので判然としないが、そうであれば、複数文で成る文章で使われた係結びの文について述べたものとして、「姉小路式」や『至宝抄』等よりも、視野の広い把握がなされているものとも考えられる。

「押字」という用語については、文献ごと、或いは文献中でも、まちまちな使われ方をしているものと思われ、この記述の真意を汲むには、それをすれば判るという保証は無いが、『連歌てにをはの口伝』そのものの調査をせね

ばならないだろう。

ただし、『連歌てにをはの口伝』の「こそ」の係結びの把握はやはり崩れたものでもあったと考えるべきもののように、助動詞「らむ」の係結びについては、

一、深山は雪のさこそふるらん

かやうにてもはねられ候。また、ふるらめともあるべし。（一三九頁）

と述べている。近世初期には、個体差はあろうが少なくとも一部では、この程度にまで「こそ」の係結びの把握が崩れていたことが窺える。こうした状況を今川氏真の語法も反映したものと見ることは可能であろう。『連歌てにをはの口伝』の記述に従えば、許容例乃至は正しい例であるとさえ考えられる節がある。「正規の語法」に則って詠まれた可能性も考えられる。

『連歌てにをはの口伝』の状況を考えるための資料として管見に及んだものに、宗牧・宗養仮託の著『連歌秘袖抄』がある（本文は参考文献一六を使用）。『連歌秘袖抄』には下記のようにある。

一 太山は雪のさこそ降るらん

ふるらめにてよし。(三七頁)

取り扱う例文が『連歌てにをはの口伝』と同じものであり、『連歌てにをはの口伝』の語法的な「崩れ」方から見ると、『連歌秘袖抄』のようなものから『連歌てにをはの口伝』に至ったという流れが想定出来るのかもしれない。『連歌秘袖抄』の方が、今日の研究水準から見れば妥当な係結びの把握である。これは、『連歌秘袖抄』の方が「古態」を保っていると考えるべきなのかもしれない。『連歌秘袖抄』は、「こそ」の係結びの文末用言活用形把握についても、

一　こそと一句のうちにあらば、ゑ

けてせられぬ、是韻にをき

てよし。さなければ、不留候也。(三三頁)

と、エ列音として「姉小路式」等に近い把握を示している。

『連歌秘袖抄』の成立について白石氏は、同文同内容の箇所を持ち、『連歌秘袖抄』から必要部分を抜き出して成ったと考えられる『連歌三部書』があることから、上限を宗養の没した永禄六年十一月、下限を『連歌三部書』の写本のある文禄三・四年頃としている。

『連歌秘袖抄』の示した語法的把握が「崩れた」形になっ

ている『連歌てにをはの口伝』は、やはり『連歌秘袖抄』よりも後の成立になるのではないかと思われる。それは、今川氏真の同時代前後のことであろう。

『連歌てにをはの口伝』、そして今川氏真の詠作の語法学的水準は、今日的視点から見れば、拙いものと見なければならぬであろう。しかし、口語における助動詞「らむ」の末裔である助動詞「らう」の無活用状態や、それが一部の見解であるとしても疑問文での専用視、そして「こそ」の係結び規制の崩壊など、助動詞「らむ」の已然形の生存は困難な状態であったと考えられる。

助動詞「らむ」は無活用化し、一種の「助詞」のようになっていたのではないかとも思える。用語を調査していないので述べる資格の無いところを言ってみたいので敢えて言うが、「姉小路式」の言う「はねてには」や『至宝抄』の言う「はね字」といった表現は、この間の消息を物語っているようにも思える。

『詠草中』の用例は、今川氏真の学的水準を反映すると同時に、正に崩壊しようとしている文語における「こそ」の係結びの理論的把握状況をも反映していると見ることも

出来るであらう。

五、疑問文と主格を示す格助詞「の」

本居宣長『詞の玉緒』（本文は参考文献一〇を使用）は、「疑ひの辞ある下におく」と題する節で、『古今和歌集』から二二番歌・七二〇番歌・八六番歌・一七二番歌・三八七番歌を証歌として挙げ、疑問語と格助詞「の」との文中位置関係を整理し、下記のように記述した。

これらは上に や 何 などとうたがひの辞をおきて。下をその結びにてとぢむる中間におくのもじ也。

此格いとおほし。（一一九頁）

『詞の玉緒』の挙げる例に用いられた格助詞「の」は、総て主文の主格を表している。そして、「疑問語―主格」の―文末用言（連体形）の形になっている。この構造認定は現在も襲用されることがあると思う。

『詞の玉緒』は挙げていないが、『古今和歌集』には、「主格「の」―疑問語―「らむ」の形の例もある。

篝火にあらぬわが身のなほもかく涙の河にうきても
ゆらむ（五二九番歌。二二頁）

このことについての整理や議論を知らないので、音数律などの都合で生じた派生形だと思って本稿では済ませておく。ここでは、『古今和歌集』には両形式があったことを押さえておく。

同様に両形式が併存していたことは、以下の挙例のとおり、『新続古今和歌集』においても確認出来る。

さ夜ふくる枕のうへに声たてて雲居の雁のいつち行

くらん（一〇八番歌。七二四頁）

思ひそむる心の色の一しほにいくたび袖のまづしを
るらむ（一〇二〇番歌。七四四頁）

今川氏真の詠作における助動詞「らむ」で閉じる疑問文のうち、文中主格を示す格助詞「の」が使用されている用例は二〇例確認出来た。うち二例は『詠草中』のものであり、表記以外は全く同じ、すなわち重出歌であるが、用例数としては延べ数に含めた。

この二〇例について疑問語と主格を表す格助詞「の」との位置関係で見ると、『古今和歌集』そして『新続古今和歌集』とも同様に、「疑問語―主格「の」―「らむ」の語順となるものと、「主格「の」―疑問語―「らむ」の語順

となるものとの二種類がある。以下、それぞれを「ア」「イ」として、実例を列挙する。

ア、「疑問語―主格「の」―「らむ」の語順となるもの（一四例）

- 一、いかなれば心の空に晴ぬらむ都といへはおほろ月よの（今川氏真詠草二二一番歌。七一七頁）
- 二、月日経て浮世に増る奥山を侘て住とや人のみるらん（百首〈自筆〉九五番歌。七三二頁）
- 三、月かけは雲も及はぬ大空をいかに時雨のわきて降らん（法衆百首四三番歌。七三五頁）
- 四、古郷に帰る友とや暁の夢をさそひて雁の行らん（百首〈百イ〉一〇番歌。七四〇頁）
- 五、暑にやきならし衣ぬきすて、杜の梢に蟬のなくらん（百首〈百イ〉三四番歌。七四一頁）
- 六、長月の長き夜なれと日の影や急て今日のくれとなるらん（百首〈百イ〉五五番歌。七四一頁）
- 七、天の戸のあくれはかすむあしひしの山にや春の立はしむらん（詠草中二三番歌。七五一頁）

八、深山までせはめし木、の冬かれに心ひろくや月のすむらん（詠草中五一番歌。七五二頁）

九、深山までせはめし木、の冬かれにこゝろひろくや月のすむらん（詠草中九二番歌。七五四頁）

一〇、うらやみし人に残りていつ迄か数ならぬ身の年をつむらん（詠草中三九四番歌。七六八頁）

一一、夜もすからめて、や鹿のなきぬらん物思ふへき月の影かは（詠草中六六四番歌。七八〇頁）

一二、さかりなるいくらの花のちりぬらんとしもなきみは残る世に（詠草中六八一番歌。七八一頁）

一三、いかにねていかなる物のさめぬらん我に残れる夢のおも影（詠草中七二二番歌。七八三頁）

一四、軒におほふ蘭生の竹のふかきよにいつくをうすく月のもるらん（詠草中七九七番歌。七八六頁）

イ、「主格「の」―疑問語―「らむ」の語順となるもの（六例）

一、ふりにける法のしるしの朽やうて其暁をいつと待らん（今川氏真詠草二二〇番歌。七二三頁）

二、名計はあふ坂山のいかなれはわきて行きの関と成ら

ん（今川氏真詠草二九六番歌。七二二頁）

三、と、こほるうき世と思へは老らくのいつしか夢の直路きぬらん（百首〈自筆〉九八番歌。七三二頁）

四、うたかはし誓は世、の神かきのいにしへ今となと隔つらん（詠草中二三九番歌。七五七頁）

五、いとけなき枕をかりのおも影のいつち六十年の夢と覚らん（詠草中六九一番歌。七八一頁）

六、見ては只心そとまる河橋のいかにうちてふ名をなからん（草庵中八五番歌。四二八頁）

「ア」の一・五・六・一二、「イ」の一・二・三・五が、疑問語が「原因・理由」を疑うものであると本稿は解釈する。その他は分類項を設ければ、「時間」・「場所」・「数量・程度」・「引用」などといったものが当てられそうであるが、疑問副詞の概念規定に依存するものが殆どであり、有意義なものとは思えないので、省略する。

この疑問語と主格の格助詞「の」を併用する文に用いられた助動詞「らむ」が、所謂「疑問副詞省略」の疑問推量用法の構文を形成する先行例とされることがある。現在では、中古語法としては多田氏などから疑義も呈されている

見方であるが、本稿資料は中世末期の擬古文となるもので、そのような類推があったかどうか検討しておく意義もあろうと考え、次節で検討しておく。

六、格助詞「の」による連体形終止について

疑問語を用いず、格助詞「の」により主格表示をした文に用いられた例は、以下のとおりである。

一、姿か崎代々の様也二月のけふさへ水の氷ゐるらん（今川氏真詠草一一六番歌。七二三頁）

二、姿原や閑なる夜も風早の浦とて月の舟つなくらん（百首〈百イ〉四九番歌。七四一頁）

三、音なしの名こそある世に玉ならぬ滝つ思ひの外に散らん（百首〈百ロ〉七二番歌。七四八頁）

四、さえわたるみそれ氷をつみそへてけふ七種の数まさるらん（詠草中一〇八番歌。七五五頁）

五、逢事のと絶のはしをかさ、きのより羽かけ継待わたるらむ（詠草中二五五番歌。七六二頁）

六、住やつす葎のかきに月を留てあるしと虫の声つくすらん（詠草中三七〇番歌。七六七頁）

七、朝霞風もみとりに遠山の眉を柳に吹うつすらん（詠草中四六二番歌。七七二頁）

八、心ある人も見しよを此さとに馴ぬる月の思ひ出らむ（詠草中五二六番歌。七七四頁）

九、天川たえすこゝろをつくしなる一夜てふ名の世に流るらん（詠草中七三三番歌。七八三頁）

一〇、けふといへは心得かほに朝戸より初秋かせの袂とふらむ（詠草中七三三番歌。七八三頁）

一一、とはれしの宿の恨を白雪の道もなきまでかねてふるらん（詠十五首和歌五番歌。七八七頁）

一二、橋ならて逢斗りなき彦星のうらやみぬらん鳩の通路（草庵中一二一番歌。四三一頁）

右のうち、不定疑問文であると見うるものは、係助詞「こそ」の係結びの流れにより、逆接構造と見ることの出来る構造になっている第三例くらいであろうと考える。ただし、そう解釈しなくてはならないとも思われない例である。その他のものは、素直な推量であると解釈してよいであろう。少なくとも、この詠者には、格助詞「の」による不定疑問文の構成という発想は無かった、或いはあっても殆ど用い

ようとはしなかったものと考ええる。

七、 おわりに

以上、本稿では、主として助詞との関連を取り上げ、今川氏真の詠作における助動詞「らむ」の実例を見た。「こそ」の係結びの崩壊を裏付けるものがあつたが、既に崩壊が始まつてから久しく、事珍しいものでもない。本稿では、『連歌てにをはの口伝』の記述に着目し、当代文語としては、正格の語法として扱う向きもあつたのではないかと考えてみた。

また、主格表示の格助詞「の」を併用した文が豊富に用いられているところから、疑問副詞を「省略」して不定疑問文を作るとされることがあることに鑑み、そのような事例の有無を検討してみた。これについては、一部解釈の可能性のある例はあるが、殆どは素直な推量文となっていると考えた方がよいと思われるものであつた。

「現在」とされる時制の様態など、検討できる項目はまだまだ存在するが、今後の課題としたい。

【参考文献一覧】

- 平成二二年三月
- 一、青島徹「疑問副詞の省略」(『国語と国文学』第三二卷第一号、昭和三〇年一月)
 - 二、浅見徹「助動詞の展開——「らむ」の場合——」(『岐阜大学研究報告——人文科学——』第一四号、昭和四一年三月)
 - 三、糸井通浩「古今集の文法」(増田繁夫ほか編『古今和歌集研究集成 第二卷 古今和歌集の本文と表現』(風間書房、平成一六年二月)所収)
 - 四、井上宗雄編著『中世和歌 資料と論考』(明治書院、平成四年一〇月)
 - 五、井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』(笠間書院、平成一九年七月)
 - 六、伊牟田経久「係り結びについての一考察——誤用とされる例をめぐる——」(『国語国文薩摩路』第四一号、平成九年三月)
 - 七、色川大輔『「新続古今和歌集」の「ラム」』(『国学院大学大学院紀要 文学研究科』第三九号、平成二〇年三月)
 - 八、色川大輔「家の三代集」における助動詞「ラム」の用法について(『国学院大学大学院紀要 文学研究科』第四〇号、平成二二年三月)
 - 九、色川大輔「武家歌人今川氏真の詠作における助動詞「らむ」について——疑問語との結びつきをめぐる——」(『国学院雑誌』第二一八卷第六号、平成二九年六月)
 - 一〇、大野晋編『本居宣長全集 第五卷』(筑摩書房、昭和四五年九月)
 - 一一、小田勝「係結の異例」(『岐阜聖徳学園大学紀要(外国語学部編)』第四一集、平成一四年二月)
 - 一二、金子金治郎編『連歌貴重文献集成 第一〇集』(勉誠社、昭和五七年一二月)
 - 一三、観泉寺史編纂刊行委員会編『今川氏と観泉寺』(吉川弘文館、昭和四九年一二月)
 - 一四、北原保雄「「らむ」留めの歌における既定と推量——原因などを推量する意味はどこから生じるか——」(『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』(三省堂、一九九三年七月)所収)
 - 一五、木藤才蔵校注『中世の文学 連歌論集(二)』(三弥井書店、昭和五七年一二月)
 - 一六、白石美鈴「日本女子大学日本文学科蔵『連歌秘袖抄』の翻刻・紹介」(『日本女子大学紀要 文学部』第六一卷、平成二二年三月)

平成二四年三月)

一七、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第一巻

勅撰集編 歌集』(角川書店、昭和五八年二月)

一八、鈴木義和「しづ心なく花のちるらむ」型の文について」

(藤岡忠美編『古今和歌集連環』(和泉書院、平成元年五月)所収)

一九、多田知子「のーらむ」文型について」(藤岡忠美編『古

今和歌集連環』(和泉書院、平成元年五月)所収)

二〇、永津陽子「翻刻『連歌てにをはの口伝』」(国文目白

第二二号、昭和五八年三月)

二一、根上剛士「近世前期のてにをは書研究」(風間書房、平

成一六年三月)

二二、根来司解説「姉小路式・歌道秘蔵録・春樹頭秘抄・春

樹頭秘増抄」(勉誠社、昭和五二年二月)

二三、根来司「てにをは研究史——てにをは秘伝書を中心と

して——」(風間書房、昭和五五年八月)

二四、野村剛史「三代集ラムの構文法」(川端善明・仁田義雄

『日本語文法 体系と方法』(ひつじ書房、一九九七年

一〇月)所収)

二五、福井久蔵編『国語学大系 第七巻』(国書刊行会、昭和

一四年九月)

二六、福井久蔵編『国語学大系 第八巻』(国書刊行会、昭和

一四年九月)

二七、松尾捨治郎『国語法論攷』(文学社、昭和一一年九月。

白帝社、昭和三六年一月追補版)

二八、松尾捨治郎『助動詞の研究 自他の対応を中心として』

(文学社、昭和一八年二月)

二九、山口明穂「十三代集における係助詞「こそ」の用法」(愛

知学院大学国語国文学報」第一九集、昭和四〇年一月)

三〇、山口明穂「係り結びの解消」(月刊文法」第三巻第五号、

昭和四六年三月)

三一、山口明穂「係結び表現の機構」(『中世国語における文

語の研究』(明治書院、昭和五一年八月)所収)

三二、湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』(風間書房、昭和

五六年二月)

三三、劉志偉「姉小路式」テニヲハ論の研究」(京都大学学

術出版会、平成二四年六月)